

間桐先輩の2度目の恋

ローランゲート・ペろぺろ丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

清楚なんて幻想は捨てなさい

目次

間桐先輩誕生	1
間桐先輩脱水	10
間桐先輩停止	22
間桐先輩傷心	30
間桐先輩救済	39
後書きとこれから	57
赤崎後輩奮起(番外編)	65

間桐先輩誕生

「オオオ、オ、オオオ、オおおおあん！オオオ、オ、オオオ、オおおおあん！！」

間桐 桜は飲んでいた。

飲みながら泣き、泣きながら飲みまくっていた。

そして、恥も外見もпойして泣いていた！

この駄文を開いてしまった被害者諸君。

安心してほしい。

これがこの間桐 桜のスタンダードである。

これが！ 彼女の！ スタンダードである！

事の始まりを話そう。

まあ、諸君もなんとなく察しているかもしれない。

なので、すんごく簡単に結論を述べよう。

衛宮士郎 結婚っ！

遠坂凜 結婚つつつ！

詰まる所、こういう事だ。

好きな人が姉に取られた。

そして、問桐 桜は飲んだのである。

「ここで Fate を知っている諸君は、『いや、叫ぶんならバーサーカーみたいにして、安心してほしい。』って表現すれば良いじゃない」と。

「安心してほしい。(2度目)」

問桐 桜だって曝け出したい時もある。

大好きな人が姉に搔つ攫われたのだ。しかも2人で幸せそうに指輪を見せ付けながらの写真もスマホに届いている。

敗北なんて軽いものではない。冷酷無比なノツブだってこんな事しない。

『「つかこの桜ってどのルートなの？」』

そんな事を考えている諸君にお教えしよう。

細けえ事はいんだよ!!

しかし、それでも気になる方も居るだろうから軽く説明しよう！

幸せな家庭に生まれ、初めては一桁で、相手は虫で、セカンドヴァージンは兄貴な桜さん。

これだけ！これだけ覚えてもらいたい!!
ぶつちやけ、この子のメンタルおかしくない？

まあ、そんなメンタルを無意識に支えたのが衛宮士郎という原作主人公なのだ！

まあ、女狐が陥落済みだが（笑）

兎にも角にも、間桐さんは今回の吉報（世間的には）を受け、あれよあれよという間に結婚式も開かれ、もちろん参加し、無事それが終わった後にこうして飲んだくれてるわけなのだ。ちなみに、年齢設定は20歳以上くらいだからお酒飲んでも許されます。未成年の人は飲んじやダメだよ！

『そういえば、桜つて聖杯のカケラがどうこうで最終的にエミヤに殺されなかつた？』
細かい事が気になる諸君の疑問にお教えしよう。あ、その前に。

安心してほしい。（3度目）

結論から述べると、その辺は大丈夫だ。

実は間桐さん。あの金ピカに言われた言葉をそれなりに気にしていた。

しかし、解決策なんてそんな簡単に転がっているわけではない。

21歳くらいの時、「そろそろやばいなあ」なんて思いながら、PCで『呪い 落とし方』とか調べちゃうくらい切羽詰まっていた時の事だ。

「それ、多分重曹で落ちますよ。」

Yahoo!の質問箱に残っていた質問に返答が返ってきたのだ。どうにもこの返答者、自身も似たような事例があったらしく、どうにかしようと考えて頭が狂った結果、重曹に手を出したのである。

白い粉は人生を変えろというが、今回も例に漏れる事はなかった。

まさに蒼天の霹靂。いや、意味よくわかんないけど。

しかし、問桐さんは困ったのだ。

重曹を使うのはいいが、どうやったら呪いが落ちるのかわからない。

深く考えて、考えて、考えてー

考えるのをやめた。

まあ、飲んだのだ。

そしたら、出た。

下品な話、お通じがよくなった。

そこには、みんな呪つちまうぜオーラを纏つた何かと臓硯（虫）が浮いていたので、程よく冷静にジャーした。

こうして、桜の命は救われ！間桐の闇は葬られたのである！！

さてさて、話を戻そう。

諸君の中の勘のいいモノは気付いちやつたかもしれない。

「ここまで私は、彼女が”一人で”飲んでいるなど一言も言っていない事を。」

「さ、桜ちゃん。気持ちにはわかるけど落ち着こ、ね？」

「藤村先生ダメですっ！桜の奴完全に吞まれてますっつ！焼酎の瓶掴んで離しませんつて！」

「サクラ、当初の目的完全に忘れてるわね。」

我らの藤村先生。

セリフも多分これだけの美綴綾子。

みんなの妹イリヤさん。

実は今回の飲み会。メインは藤村先生なのだ。

考えても見てほしい。

弟と教え子に先にゴールインを決められた女の気持ちを。

嬉しいけど寂しいような。アレ、何この節操勘？みたいな心境が藤村先生に纏わり付いているのである。重曹で落ちるだろうか？

そんなわけで、今日の集まりは『藤村先生を慰めよう』の会なのだ。なのだった。酒の力は恐ろしく、問桐さんの心の防波堤はそれはもう簡単に砕け散った。

「なぐんぐん でえぐ えぐ えぐ えぐ!!! どーじて姉さんなんですがあああ！好ぐ ぎだったのにいい！すつごく大好きだったのにいい!! そもそも姉さんも姉さん なんですよ！途中からぐ ででぎでサラつと搔つさらいやがってええぐ えぐ えぐ!!! あんの手グセの悪い泥棒猫がアアアア!!!」

一通り呪詛を撒き散らした問桐さんはテーブルに頭をぶつけて黙る。

急に訪れた静寂に、気持ちはわかるけどドン引きカマしていた3人は黙ったままだ。やがて、顎をテーブルに乗せたままとりあえず正面を向いた問桐さんは。

「……うえーん。」

泣いた。

「うー、先輩いい…っ」

「わかる、わかるわよ桜ちゃん。ずっと好きだったんだもんね。うん、うん。」

「藤村先生え…っ！わたしっ、わだじいいいい!!」

「よしよーし、慰めてあげるからおいでー。」

結局この後は聖母の微笑みを見せる藤村先生〇〇歳が間桐さんを慰めた。

しかし、話はまだ終わらない。

そもそもこのまま終わっちゃうとタイトル詐欺になってしまう。

なので、少し時を飛ばそう。

間桐 桜！28歳の頃の秋!!

地獄のような結婚式3次会から早5年が過ぎ、それぞれがそれぞれの人生を歩む頃。

新都で働くOL、間桐さんもそこにいた。

既に勤め始めて3年、仕事の事もだいたい把握して、同期からも慕われるようになっていた間桐さん。

そんな問桐さんに、半年程前から後輩ができたのだ。

かつては問桐さん自身が後輩であり、先輩の背中を追いかけていた。しかし、それと過去の話だ。大人の余裕と美貌を手に入れた問桐さんは、すっかり先輩として憧れの的となっていた。

「問桐先輩！おはようございます!!」

「おはよう、赤崎君。」

そして、これが件の問桐先輩の後輩。名前は赤崎 篠辺という。今年の春、高校を卒業した18歳の青年だ。決して器用というわけではないが、人当たりも良く、何事にもまじめに取り組むその姿勢は周りからも高評価である。

もちろん、問桐先輩もそんな彼には好印象を抱いて…いや、ぶっちゃけ恋していた。

ココロと変わる彼の表情に心奪われたのだ。チヨロい。

そんな問桐先輩の心境は、それはもう慈しみに満ちて

「(はああん♡しのべきゅんチヨロカワイイ!!もう食べちゃっていいかな?くうくうお腹が鳴りまくってるよう♡♡なにこのあどけない表情っ。誘ってる?誘ってるよね!?)

このっ♡先輩を誘うなんてイケナイ後輩めっ♡個人的にイロイロ教えてやるからなオ
ラツ♡♡♡♡」

満ち過ぎて汚染されていた。何処ぞのアンリマユより厄介な泥である。正義の味方
さんこつちです。

28歳の間桐先輩は、あれ以降恋愛を避けるように仕事をしまくった。仕事の鬼と
なったのだ。しかし、フラストレーションは溜まる一方。そうして忌避していたのに恋
愛小説にのめり込み、外見はともかく、中身はすっかりポンコツと成り果てたのだ！

赤崎先輩はそんな間桐先輩の心境を知るはずもない。間桐先輩はアカイアクマの妹
だ。猫被りは最早お家芸である。

これは、過去のトラウマでこじれ過ぎちゃった間桐 桜が、健全につ！多分健全に2
度目の恋を成就させようと足掻く物語であるっっ!!!

間桐先輩脱水

「だ、駄目ですつ間桐先輩い…つ

何言ってるの篠辺きゅん♡女は狼なんだよつ？♡♡♡あんなにメスを誘惑しといて襲われなと思うたかこのつ♡♡オラツ♡さっさとパパになれつ♡♡♡

あううつ…そ、そんなにしたら…つ♡

あ、今鳴いたよねつ♡いいよーすぐくポイント高いよお♡♡お姉さんに無茶苦茶にされて声漏れちやう篠辺きゅん可愛い♡好き♡好き♡好き♡♡♡♡

も、もう駄目え♡ま、まどおしえんばいい♡♡

うんつ♡いいよつ♡一緒につ一緒にいいいい♡♡♡

んっほおおおおああおおおつつ♡♡♡♡♡

ふう。」

やあ、諸君。おはよう。

今日も清々しい爽やかな朝が始まったよ。

えっ？冒頭のこれは何かかって？

○ナニーだよ。

諸君の中で経験ないですといった者はいないだろう。自家発電という行為である。

これは、間桐先輩の朝の日課であり、赤崎後輩への愛を肉体に刻み込むための儀式なのだった!!

現在、間桐邸は間桐先輩以外には誰もいないのでやり放題のパラダイスなのである！
一人二役のドン引きプレイもなんのそのだっ！なんてったって、誰もいないからネ！
恒例行事が済んだ間桐先輩は、その艶めかしい肉体を清める為にシャワーを浴びる。
こうして皆に頼られ信頼される、無敵の間桐先輩となる。

その過程は、語られるべきではないタブーのような物だ。にーどうとうのうというこ
とにしてもらいたい。
して、もらいたい。

それよりも、だ。

諸君の中で『俺の知ってる桜はこんな事しない』なんて世迷い言を吐いているものが
いるが、この際だから教えておこう。

そんな幻想捨てなさい。

前回の第1話を見て、話の方向性は理解頂けたらろう。

最初はタイトルから「ああ、ラブコメか」なんて考えて地獄を見た被害者だった諸君
も、2話を開いた時点で免罪符は機能していないっ。

諸君らは既に、共犯者なのであるっ！

ちなみに、第3話を開くと加害者になるのでご注意を。

それが嫌ならば、『桜ちゃんかわいいやったー』と感想に書き、10の評価ボタンを押すがいいっ！いいっばいいっばいい押すがいいっつ！！

さて、そんな催促の間にも間桐先輩はレディーススーツに着替えたようだ。

キツチリしているスーツを押し上げる胸部だが、決して下品ではない。あくまで上品な美を醸し出している。

まさに現代のパールヴァティーである。

眩しいっ！眩しいぞ間桐先輩っ！！

「さーて、今日も一日篠辺きゆんを見てお仕事しなくっちゃ。あー、今日も爽やかな笑顔で挨拶してくれるんだらうなあ。ダメだよ篠辺きゆん。お姉さん篠辺きゆんのせいでいつも女の部分が震えてるんだよ？♡お付き合いしたら3日間は『わからせ』すつから覚悟しろよっ♡♡」

もちろんその中身はどろっどろである。

冬木の性欲モンスターと成り果てている癖に、解消のための竿は一本以外認めない。

必然的に選ばれた者は干からびる。生け贄かな？

「あ、そうだ。忘れてた。」

『おっと、家を出る準備の出来た間桐先輩が部屋に戻っていったぞ。一体何を忘れたのかな?』

そんなことを考えている、まだ幻想から抜けきれていない諸君。どうか忘れないでほしい。

ここの間桐桜のスタンダードを。

「替えのパンツ持っていかないと。篠辺きゅんと一緒にいるとすぐダメになっちゃうから」

お前の頭は既にダメなんだよなあ。

なんて事をボヤける奴は生憎近くにいないっ!

幸せとはっ、真実を知らない事なのであるっ!!

故につ! 間桐変態は間桐先輩として在り続けられるのだあっ!!

間桐先輩、いつてらっしやいませ！

☆☆☆☆

オマケ 『今日の慎二』

「アレ？何だよこの荷物。誰だよこんなの送ってきたの。ん？なんだコレ。手紙？

えーつと…。

『お久しぶりです、兄さん。桜です。本日はお願いがありまして、贈り物をさせていただきますました。どうか、荷物の中を確認していただきたいと思ひます。』

えつと…：水35ℓ 炭素20kg アンモニア4ℓ 石灰1.5kg リン800g

塩分250g 硝石100g イオウ80g フツ素7.5g 鉄5g ケイ素3g

その他の…

ハア？なんだコレ？なんでぼくがこんな事しなきゃならないんだ？

ん？なんか書いてる…『もし拒否されるなら、兄さんの会社にコチラの「まる〇しシ
ンジくん」猫耳モードの写真を』つてはああつ!?なんでつ!?なんでアイツが僕の全裸写
真持つてんだよっ！いや、それよりも…っ！クソっ！さっさとやり方教えろっ！

まず、地面にこのシートを敷いて…なんだよこの魔方陣みたいなの。まあいいや。次。

各種材料おい…てつと。水って重たい、なっ！

最後に、両手を地面に…パンツ！」

次回『代償』

☆☆☆☆

さてさて、ただ今お昼の時刻。問桐先輩達もランチの時間です。

ちなみに問桐先輩のパンツのストックは後3枚。既に7枚は使えなくなってるぞっ

♡

「問桐先輩っ！一緒にお昼食べませんか？」

「ええ、私もお願いしようと思ってたの。」

健気な感じの青年、赤崎後輩が問桐先輩を誘った。

赤崎後輩は間桐先輩をすつごく尊敬している。それもそうだろう。仕事ができて、指導も上手く、綺麗で優しいお姉さんな先輩だ。伊達にヒロインやっていた訳ではないのだ。

「篠辺きゆんはお昼も素敵に可愛いなあ。食後のデザートになってくれないかなあ♡」
アレ？ 赤崎君、今日はお弁当なのね。」

「はい！ 実は母に自炊してないのがバレちゃって…。『アンタは放っておいたらコンビニの唐揚げばかり食べるから』って。」

えへへ。と、照れ臭そうに笑う赤崎後輩。正直どうなの？ といえるくらいの偏食っぷりだが、間桐先輩はどう捉えるのか。

「(いつつもモキユモキユ唐揚げ食べてる篠辺きゆんも可愛いけど、叱られてしゆんとしながらもお弁当作っちゃう篠辺きゆんも素敵♡お姉さんのポイント高いぞっ♡♡あー、早く食べちまいてえ…♡♡♡)」

ヒエツ…!?(ドン引き)

恋する女は無敵なのだろうか。コレは怖い。もう赤崎後輩が何を言っても好感度が上がるヤンデレシステムでも搭載しているのだろうか？

さて、お弁当ご開帳タイムだ。

間桐先輩のお弁当は、正に理想の献立といったところか。きんぴらやほうれん草の胡麻和え、鯖の塩焼きと和テイストで攻めている。一つのお弁当の中で彩られる白ご飯とおかずは正に黄金比というやつだ。

一方赤崎後輩はウインナーに卵焼き、ミートボールの入った正に学生のお弁当である。

自分の好きなものを詰め込んだ、言わば宝箱のようなワクワクがあるだろう。

いただきます、と二人揃って手を合わせる。

間桐先輩の頭の中で『二人初めての共同作業』なんて一文が流れるが、決して動揺なんかしない。後でパンツを取り替えるだけである。

「アレ？間桐先輩。お弁当箱もう一つありますよ？！」

「あ、コレね。うーん……。実は、昨日の残りなんだけど、赤崎君食べる？」

そういつて開かれたもう一つの小さなお弁当には、赤崎後輩の大好物の唐揚げが入っていた。

赤崎後輩の目が輝く。そして、間桐先輩の目も怪しく輝いた。

「捨てるのも勿体無いし、赤崎君が好きになって思っけて持ってきたのだけれど、お義母さんに止められてるのでしょ？だから、なんか申し訳ないなつて。」

「あつーううつ、そ、そうですね。僕、今唐揚げダメでしたよね…。」

思い出したかのようにシユンとする赤崎後輩。それを見て静かに絶頂する間桐先輩。そろそろオムツでもいいかなとか考えながらも、間桐先輩は策を進める。

「でも、やっぱりダメよね。ごめんなさい。コレは捨てようと思うわ。(ホラツ、食いつけっ♡)」

「ま、待つてくださいい！あの、その…ほ、ホラ！やっぱり勿体無いし、僕唐揚げ大好きですから食べますよっ！」

「(フィィィィィッシュ!!!♡チョコ甘だよ篠辺きゅんつ。そんなんじや悪い人に騙され

ちやうよっ♡そんなことにならないように私が飼育してあげるねっ♡私を飼育して
もいーよっ♡♡♡♡♡ホント、ありがとう赤崎君。」

悪い人が何か言っているが、誰にも聞かれる事はない。犯罪とはこうして迷宮入りと
なるのだろう。ホームズさん薬キメてないで早く事件解決して、どうぞ。

恐る恐るといった感じで、赤崎後輩は唐揚げを啜える。ちなみに間桐先輩は、啜える
といった表現辺りで大洪水である。

モツキユモツキユと口を動かし、ごっくん。

赤崎後輩の目の中にハートが見えた。

「お、美味しいよう。」

「フフツ、どういたしまして。(篠辺きゅんも美味しそうだよう♡)」

そんな赤崎後輩の姿に表面上は慎ましく、頭の中でドスケベに笑う。一体どうなれば
ここまで変態になれるのか。

トランス状態の赤崎後輩は我に帰った。あたふたしながらも、なんとか先輩に美味し

いを伝えなければっ。

まだ未熟な脳細胞は、なんとか知恵を絞り出し。

「あ、えつと……。ま、毎日食べたいくらい美味しかったですっ！」

「そ、そう？嬉しいな。(エツツツツツツツ♡♡♡♡♡♡)」

間桐先輩は脱水状態になりかけた。

まさに無意識の言葉の暴力であるっ。無知は人を殺すのだっっ!!

こうして、間桐先輩のお弁当大作戦は大成功で幕を閉じた。しかしっ、いつか赤崎後輩を手に入れるまで間桐先輩の手が緩む事はないっ！

これは、変態ドスケベお姉さんの間桐先輩が！穩便に、なるだけ穩便に赤崎後輩を仕留めようともかく物語であるっっっ！

間桐先輩停止

『あ…♡もう撮ってるんですか？♡

お久しぶりです、間桐先輩♡♡

急にお仕事行けなくなつてごめんなさい…あつ♡ちよつとまつ♡ひやうつ♡♡♡
今つ、喋ってるんですから…つ♡もうつ♡♡

えつと…♡僕、実は…

この黒ギャルのお姉さんとお付き合いすることに――

「だああめええええええええつ」

!!!!!!?!?

レートとカレールーの分量を反対にしたカレーライス並みにヤバイぞ！うん、よくわかんない♡

「篠辺きゆんは私のモノなんだよおつ！テメエの汚ねえ手で触つていいもんじゃねえぞゴラアア！私がつ！一からつ！磨いて味付けしてむしやぶりつくすんだヨオオオ！！」

諸君の心境は正しい、と言っておこう。

間違いなく、夢の中の黒ギャルも今の間桐先輩も畜生なものには変わりはない！

しかし、しかしである！

彼女は間違いなく被害者なのだつ！共犯者である諸君つ、そして！加害者である事を受け入れた一部の猛者達も聞いてほしいっ！！

全ての始まりはつ！衛宮士郎なのであー！

☆☆☆☆

おまけ

『今日の臓硯』

「さ、桜メエエ…ツ！ワシを糞と一緒にトイレに流すなぞ舐めた真似をしてくれおつて…ツ!!」

しかし、ここは一体何処じゃ？肥溜めの中から何とかマシな水の中へ逃げてきたが…。

途中で開いた小さな穴に入ってから掃き溜めは見えんのう……。ん？コレは、もしや間桐家のトイレではないか？

よしとりあえず便器の中から出てー誰か入って来たの。

コイツは確か…桜の担任だったーギヤアアアア!!!?や、やめんかああ!!か、○ビキラーは人(?)に向けてはならんとっ!?

ピギイイイイツツ
!!?!?」

次回『○マキラー』

☆☆☆☆

「今日も一日問桐先輩は優雅で綺麗で優しいお姉さんである。

序盤の荒れように関しては、正直何時ものことなのでお忘れ頂きたいっ！」

「あ、問桐さんくちよつといいですかあ〜？」

「どうしたの、前田さん？」

「ここで出て来たのは、問桐先輩の同僚である。名前は前田 玉藻だ！」

「彼女もまた、周りから頼られる綺麗で素敵なお姉さんである！」

「ちなみに、狐耳ではないので何処ぞのイケコンマニアと混合しないように！」

「しないように！（重要）」

「さてさて、呼び止められた問桐先輩は小首を傾げている。まさに、計算された可愛さであるっ！」

「しかし、28歳でそれやるのは中々ハードルが高いと思うのは私だけかな？」

「いえ、今度の土曜日に社内の何人かで飲みにもと思ひまして。問桐さんもどうです

？」

「そうねえ。土曜日かあ…。」

間桐先輩が悩んでいるのは、その日はやる事があるからである。もちろん、部屋の掃除とかそういったものではない。

赤崎後輩のボイス編集だ。

どうかしただろうか、諸君。

何やら『いや、そんなサラツとサイコな趣味言われても』なんて声が聞こえるのだが。

そんな、3話目にしてここの間桐先輩を分かってない発言をされても、こちらが困るのである。

簡潔に述べよう。

好きな人のボイス？録音するでしょ？

そして、寝る前に聞くでしょ？

以上であるっつ！

そんなわけで、1週間の膨大な篠辺きゅんボイスを使って、間桐先輩に愛を囁く赤坂

後輩ボイス（約8時間）を作るために、間桐先輩は一日を費やしなればならぬ！
それが、間桐先輩の安眠に繋がるのだ！

しかし、悩む間桐先輩に前田同僚はメンバーを伝えた。

「私と瀬田 空さん、倉内 音畑もいますし…赤崎さんも来る予定でございますねえ。」
「行くわ。（行くわ♡）」

即落ち2コマ。

赤崎後輩の参加するイベントに、間桐先輩が参加しないわけがないのだっ！
ちなみに、金曜日が祝日で休みなのになんで土曜日なんだろう？なんて疑問は頭の中
にはないっ。今から土曜日が待ち遠しい間桐先輩なのである！

これは、ステキな人妻（予定）の間桐先輩が、平穩に、極力平穩に赤崎後輩を手に入
れ————

「ホントは金曜日が良かったのですが、倉内と赤崎君が2人でお出かけするようで

「ん…。」

「はあ。」

間桐先輩傷心

今日は祝日な金曜日。

すっかりスーツの仕事人な間桐先輩も、今日は綺麗で素敵なお桜さんとして活動する日なのだ。

え、なに？今日は冒頭のエツチなセリフはないのだった？

桜さんも恋する乙女（28）。

時にはお洒落に街に繰り出す事もあるさ。

一日中間桐邸でハンドスナップするのは日曜日だけなのだ！

その日の儀式はまさに夏フェスのよう！

業者を呼んで作ってもらった防音部屋でシャウトに勤しむのだ！

業者の人もこんな使い方をするとは思っていなかっただろう。

しかし、今日の桜さんは少しいそいそしている。

特定の誰かに見つからないように、辺りを警戒しながら歩いているのだ。はてさて、その視線の先には一体誰がいるのだろうか？

「篠辺よ！こんなのはどうだ？」

「あ！すつごく可愛くていいと思いますよ、倉内さんっ。」

「うむっ。やっぱり余の可愛さに拍車がかかってしまっなっ！」

あー、デートしてるう。

そう！今、桜さんの視線の先では！

赤崎後輩と倉内がデートしているのだっ！

倉内が赤っぽいかわいい服を自分に当て似合っているかを赤崎後輩に尋ねている。

これは！間違いない！

「（完全にデートじゃねえかああああ!!）」

「サクラ。今女として絶対しちやいけない顔してるわよ、アナタ。」

それを見て悍ましい顔をしている桜さんと一緒にいるのは、みんな大好きイリヤさんだ。

既に年齢は30歳だというのに、見た目はまだ高校生くらいの超絶美少女であるっ！

『つーか、倉内って一体誰だよ?』

そんな諸君の声が聞こえた気がしたので、簡単に説明しよう！

アレは誰だ!?!鳥か?飛行機か!?

もちろん、余だよ♡

とは何にも関係ないはずの倉内 音炉(ネロ)さんだ!かわいいかよ。

「あんのアルトリア顔があ…っ。アルトリア単体で多種多様のクラスが出ちまって最早空気みたいなキャラの癖に、私の篠辺きゅんに色目使いやがってええ…っ!!」

「いきなり意味がわかんないし、そもそもあの赤崎って子と付き合ってるわけじゃないんでしょ?」

「イリヤさんは何にもわかってません!篠辺きゅんは私の天使なんですっ。天使を汚し

ていいのは私だけなんです！」

「もうやだこの元後輩。シロウの奴なんでフォローしなかったのよ。」

げんなり顔のイリヤさんを見無視して、桜さんは尾行を続けるっ。

もし手でも繋ごうもんなら、この街は地獄の業火に焼かれるであろう!!

あ、そういうえば関係ないんですけど。

この前の復興版ノツブイベントで、アベノツブと黒聖女と武蔵ちゃんが手に入ったので自慢します。

邪ン又なんか2枚もでちゃった…♡

☆☆☆☆

おまけ

『今日の雁夜 (with 時臣)』

「…あのさあ。」

「ハイ」

「俺、言ったじゃない？言ったよな？」

「あの、えつと…そうだな。うん。」

「魔術師の思想は正直理解できないよ、今もね。でもさ、今ならお前がお前なりに桜ちゃんを気にしてたのは。まあ、今ならホントわかる。でもな？言ったじゃん。間桐はダメだって。」

「いや、しかし。あんな感じになるとは「なつとるやろがい！」

「……………」

「なつとる！」

やろがい！

「……………」そう、だな。」

「なあ、あの桜ちゃんどう思う？あの桜ちゃん見て失神した葵さん見て、その現場を真横で見た時臣くんおいコラ。どう思う？」

「……………ま、まあ。恋は人それぞれ「アレは!!!」

「……………」

「アレは、お前の予定した恋か？」

「……………」えつと。」

「いや、お前の気持ちもわかるよ？ 仮にもお前父親だしな。娘が悪い虫に拐かされないかとか心配するよな？ この際お前の仕打ちには何も言わないよ？ 少なくとも間桐以外ならよかった。ホント。なあ、なんで間桐にしたの？」

「しかし、雁夜。魔導師としてはあの選択は「アレ見ろよお！」

「アレさ、どっち？ なあ、どっちが悪い虫？」

「……………」

「あの純粹無垢そうな青年と、呪詛撒き散らしてそうな桜ちゃん。なあ、どっち？」

「……………」

次回『仲直り』

☆☆☆☆

結構な量の石が飛んできましたが、続きをお話ししよう！
それから、音畑さんと篠辺きゅんのデートは続いたっ！

2人で服を選びあい！

2人でアクセサリーを見て！

2人でカフエに入った！

紛れもなくデートである！これは！もう！デートであるのだっ！

そんな光景を離れた場所で見守っていた桜さん。時間が経過するたびに、だんだんと目は窪み、頬は痩せこけていく。

「篠辺きゆんが、篠辺きゆんが笑ってる…私以外と、笑つ…笑つ、て…。」
「ねえ、もう帰らない？てか帰っていい？私疲れたんだけど。」

まさに地獄！せっかくの休日いきなり呼び出しをくらい、全く関係のないやつのでートをひたすら見せられる。やっぱイリヤさんは天使だねっ。

一方、桜さんは楽しそうに談笑している篠辺きゆんを黙って見ていた。おや、コレは最早積んでいるのでは？そんな諦めの感情が桜さんの心を支配する。

この桜さん、たしかに大人にはなった。しかし、恋愛に関してはクソザコ敗北者なのだ。そんな桜さんに、あの2人の中に入っていく勇氣なんて、あるはずが無い。

「…………。ごめんなさい、イリヤさん。どっか行きましょうか？」

「あ、うん。…サクラ、あのね」

「大丈夫です。気にしないでください。」

そういつて笑う桜さん。イリヤさんの目には、無理をしていることが見え見えである。しかし、女が見栄を張ろうとしているのだ。同じ女として、それは汲んでやらなければ。

「サクラ、私カラオケに行きたい。」

「いいですね。私も久しぶりに行きたくなりました。」

「よーっし！今日は目一杯歌うわよー！」

「はいっ。」

こうして、2人は尾行をやめた。そして、そのまま夜遅くまで歌いまくったのだ。

これは、傷心した心が邪魔をして気持ちほど強く出られない間桐桜が、赤崎篠辺を本

「当の意味で好きだと気づいた物語である。」

間桐先輩救済

赤崎篠辺は悩んでいた。

最近、会社の先輩の態度がどこか余所余所しいのだ。

赤崎は高校卒業し、すぐに就職した青年である。

決して学がないわけでは無いが、特に目標といえるものも無かったので、進学しようとは思わなかった。

しかし、はじめての社会への第一歩。

赤崎は生まれて初めての衝撃を心に受けた。

「はじめまして。今日から貴方の教育係になりました、間桐桜です。よろしくね。」

陳腐な言葉を使うが運命だと思った。

その柔らかな笑顔に心を奪われたのだ。

思わず見惚れてしまい、慌ただしく自己紹介を返したのを覚えている。

こうして、間桐先輩と赤崎後輩の関係が始まった

問桐先輩はとてすごい女性であった。

周りからも信頼され、指示も的確であり、指導もうまかった。

一目惚れから始まり、共に仕事していくうちに更に惹かれた。

毎日彼女と一緒にいれる事は、赤崎にとつてとても幸運な事だった。

だからこそ、恩返しをしたかった。

赤崎後輩が問桐先輩から貰ったモノを、少しでも返したかった。出来れば、この想いも伝えたい。が、それは凄く恥ずかしい。

恋慕の情はもちろんある。それと同じくらい彼女を尊敬しているからこそ、感謝を伝えなかった。

だから、彼は会社の人たちに相談したのだ。

相談を受けたのは前田玉藻と倉内音炉だった。

倉内はプレゼント作戦を提案し、前田はそれを渡せる場として飲み会を提案した。

倉内と共に買い物に行く日取りを決め、後日に飲み会を予定した。

前田は問桐先輩を飲み会に誘い、計画は完璧かに思われた。しかし、3人は大きな見落としをしていた。

間桐先輩も、赤崎後輩に好意を寄せていたということだ。

前田としては、ちよつとしたいたずら心で情報を漏らしたが、まさかその日に尾行を行うほどに赤崎に執着しているとは思っても無かった。間桐先輩は赤崎後輩に対して、弟を想う姉のような感情を抱いているくらいにしか考えていなかった。

そして、倉内も同様だった。

倉内からしても赤崎後輩は可愛い後輩だ。何事も懸命に学ぼうとするその姿勢はとも好感が持てる。もつとも、恋愛的な感情ではなかったのだが。

倉内は性格上、楽しめるものは楽しむタイプだ。だからこそ、今回の買い物も友人と一緒にいるかのような感覚で楽しんだ。

側から見て、それは紛れもなくデートだと思われるなど考えてもいない。

それを、プレゼント作戦のターゲットが見ているなど思ってもいない。

尚且つ、間桐先輩が赤崎後輩を好きだなんて想定外であった。

そうしたすれ違いの結果、間桐先輩は飲み会当日に体調を崩したとして来なかった。赤崎後輩は未成年なため、カルピスをチビチビと飲んで見るからに落ち込んでいた。倉内はポカンとしており、前田は『もしかして』なんてちよつと嫌な予感が頭をよぎった。

数合わせとして呼ばれていた瀬田空（セタ クウ）はなんのこつちやわからなかった

ので、妙な3人に事情を確認した。

そして、大きなため息をついた。

瀬田は男性社員の中ではみんなの兄貴のように慕われている。

赤崎後輩の指導係には、問桐先輩か瀬田のどちらかがとの声が上がっていた。

とりあえず、初日に交互に指導しようという手筈になっていたのだが、その後すぐに

問桐先輩が『私がやります。』と引き受けたのだ。

その辺りから、問桐先輩が赤崎後輩を想っている事を誰よりも早く察知した瀬田は、それなりの距離で赤崎と接する事にした。

それくらいには人を見る目がある瀬田からして、赤崎後輩が相談した相手が相手だ。

トラブルメーカーの倉内と、恋バナ大好きでお節介のきらいがある前田。

両者とも善意での行為なので、なんとも言えないのがもどかしい。

とにかく、ジメジメしてても仕方ないため瀬田は声を張った。その合図を察した前田がすかさずそれに乗り、よくわからないけど楽しもうと倉内も便乗した。

まだちよつと落ち込んでる赤崎後輩を、瀬田が肩を組んで引き寄せる。とにかく、赤崎後輩を振り回して気を紛らわせたのだ。

しかし、以降問桐先輩から赤崎後輩に絡む事が少なくなつた。確かに、赤崎後輩が入

社してから半年は過ぎている。基本的な事は教えたので、深く関わる必要がないのは事実ではある。

しかし、それでも楽しく談笑していた以前を思うと、あまりにま露骨に距離を置いていた。

赤崎後輩はなんかもう若干泣きそうになっている。瀬田はその度に赤崎後輩をフォローしていたりした。

一方、間桐先輩は彼女なりに思い悩んでいた。

確かに、間桐先輩も赤崎後輩に一目惚れしていたが、何時ものメスとしての本能ではなく、1人の女性として生涯を共にしたいと思えたのが、あのデート現場を見てからなのだ。

間桐先輩の頭の中では、既に赤崎後輩と倉内は付き合っている。まさか、自分の為に贈り物を選んでいたなんて思ってもいない。そもそも、あの光景でそれはない。

そんなわけで、彼女は彼女なりに赤崎後輩との距離を一定に保とうとしているが、その度に心が軋む音がした。

何故かわからないが、あの時。

自分がまだ後輩だった頃。自分の恋する先輩と、姉が結婚するとわかった時。

あの時も悲しかった。しかしそれよりも、なんといいばいいのだろうか。

安心感があつたのだ。

つまり、ホツとした。

悔しいし認めるのは癪であるが、あの何処か無鉄砲なああの先輩の手綱を握れるのは、自分の姉くらいだろう。

だからこそ、間桐後輩だつた自分は、表面上だけでも納得できたのだ。

もちろん表面上だけあつて、酒が入り防波堤が崩れた途端呪いが溢れ出したのだ。
が。

そんな過去の出来事が、間桐先輩の心を締め付ける。

彼が好きだ。しかし、私は彼を幸せに出来るか？

彼と歩きたい。しかし、私に幸せになる権利はあるのか？

彼と重なりたい。しかし、汚れた私にその資格はないんじゃないか？

赤崎後輩を想うたび、間桐先輩の中で黒いものが溢れそうになる。

最近では家に帰ると、苦しくて涙が出てきた。

赤崎後輩に会いたいののに、会いたくない。

自分を知ってほしい。でも、知られたくない。

もう心の中はぐちゃぐちゃになっていた。

赤崎後輩も、日が経つにつれ見るからに元気が無くなっていく。嫌われちゃったのかな？なんて言葉が頭をよぎった。

その度に、ため息が漏れてしまう。

もう、自分でもどうしていいかわからなかったのだ。

今日も、碌に話も出来ないまま間桐先輩は帰ってしまった。

「よう。」

そんな赤崎後輩に、瀬田が声をかけた。

瀬田からしても、今の赤崎後輩は見てられないほど凹んでいる。

ぶつちやけると、いい加減面倒になってきたのだ。

瀬田から見れば、両者とも好き合ってるのにあーだこーだと悩み過ぎなのである。

そんなわけで、強硬手段に出る事にした。

「お前さん、いつまで悩んでんだ？」

「…あの。その…。僕は、えつと……。」

「あーもうめんどくせえ。いいか赤崎。お前は男だろが。男なら、さっさと立て。んで、そのモヤモヤしたもん全部伝えてこい。」

「そ、そんな簡単にいくわけないじゃないですか。もし、嫌われちゃってたらと思うと…っ。」

「そんな時はそんな時だ。俺が良い店に連れて行ってやる。でもな、立ち止まってちゃ何も始まらねえ。惚れた女くらい、お前の力でモノにしろ。」

お前は、アイツが好きなんだろうが。

赤崎後輩の目が見開かれる。その瞳から、雫が溢れそうになっている。

そうだ。何を悩んでいたんだろうか。

赤崎後輩の心に火が灯る。小さな火は、やがて体を動かすために大きくなっていく。

彼女が好きだ。なら俯く暇はない。

彼女と歩きたい。なら足を動かさせ。
彼女と重なりたい。恥ずかしいけど。

袖で目を擦り、赤崎後輩は立ち上がった。

瀬田に目を合わせ、深く頭を下げる。

そして立ち上がると、鞆を掴み会社を出て行く。

そんな赤崎後輩の背中を、瀬田は微笑ましい目で見ていた。

間桐先輩は家までの帰路を歩く。

その心は、今の空模様のように雲がかっている。

もう、どうして良いのかすらわからない。どうしたいのかも、わからなかった。

ポツ、ポツと雨音が聞こえた。

雨音は次第に大きくなり、とうとう大雨になってしまう。

そういえば、傘持ってきてなかったな。

そんな思考がよぎるも、すぐにどうでもよくなってしまう。

いつそのこと、この雨と一緒にこの心のモヤも流されてしまえばいいのに。

そんなできもしないことを考えている自分に、呆れたような笑みが零れた。

「……………い……………ま……………せん……………」

雨の中で、何かが聞こえた気がした。

しかし、雨粒の音は大きく、それを遮断してしまう。

「ま……………せ……………間桐……………んぱい……………」

だんだんと大きくなるそれに、また笑みが溢れる。どうやら、幻聴を聞くほどには心が病んでいるらしい。全く酷いものだ。

彼がいるわけない。だから、これは幻聴なんだ。

そう、自分に言い聞かせ……………

「間桐先輩!!」

出来なかった。後ろから、誰かが声をかけてきた。いるはずなのに、そんなわけないのに。

少しだけ、視線を後ろに向ける。

いた。

ずっと走ってきたのだろうか。

手を膝の上へのせ、肩で息をしている。

傘もささずにここまできたのだろう。スーツもびちやびちやになっていた。

「ど、どうしたの赤崎君？」

自分でも酷いと言えるほど、ヒビ割れたような声がでた。顔を見られたくなくて、すぐに視線を前に戻した。

嬉しかったが、苦しかった。

間桐先輩は決して鈍感ではない。

こんなになるまで自分を追ってきてくれたのだ。

もしかしたら、彼はそうなのかもしれない。

「ま、間桐、先輩。俺っ！俺、間桐先輩に言わなきゃならない事が、あるっ、んですっ！」

期待が心の中で高まる。しかし、今の間桐先輩の心はかつての頃のように弱っている。

その純粋な気持ちに応えられるほど、彼女は自分の汚れを許してはいない。

やめて欲しかった。聞きたくなかった。知りたくなかった。やめて、言わないで。

「それ、明日にお願いできない？ほら、雨も降ってるし。」

「今、じゃなきゃ！ダメなん「ヤメてツ!!」

赤崎後輩の言葉が止まる。

それは言葉を遮られたからではない。

泣いていたのだ、間桐先輩が。

この大雨の中、自分と同じように傘もさささずに濡れの彼女の目に、涙を見たのだ。

ああ、なんと情けないことか。

自分は、好きになった女性を泣かせるダメな男なのか。

でも、もう止まらない。男なら。
だって、彼女が好きだから。

こちらに体こそ向けたが、俯いて顔の見えない彼女に近づくと、
彼女はそれに気づき、後退りしようとして足を絡ませてしまう。

バランスを崩し、仰向けに倒れようとする彼女の手を、彼はしっかりと掴んだ。

「先輩。」

「や、やめて……っ。」

「先輩、好きです。」

嬉しい。

「わ、わたしはっ……!」

「僕はっ、先輩が好きなんですっ!!」

嬉しいっ。

「だ、って……っ私は汚れて「そんな事ないっ!」

「先輩は!ちつとも汚れてなんかない!いつも優しく、料理が上手くて、色んなこと知ってて!!そんな優しい先輩が、汚れてるわけない!」

「違うのっ！本当の私は根暗でっ、誰かに依存する事しか出来なくてっ！今も、昔の恋を引き摺ってるようになっ……！私は……っ！」

間桐桜と赤崎篠辺の目が重なる。

間桐桜は今にも壊れそうな淀んだ目をしていて。

赤崎篠辺はその闇を取り払うかのように澄んだ目をしていて。

間桐桜の言葉に赤崎篠辺が返答する。

ただ、その闇を吹き飛ばすために。

「僕は、先輩の昔の事なんて知らないっ。どんな辛い事があったのかとか、昔好きだった人の事とか、何にも知らない。けど、そうだけど！」

僕は、貴女と一緒に生きたいんです!!」

「っ……!!」

「苦しかったことなんて、忘れさせてあげますっ。悲しい思い出も、楽しかった過去に変えます！どうすればいいのかなんてっ、まだ全然わかんないけどっ！」

「僕が絶対、貴女を幸せにしますっ！」

それは、純粹故の叫びだった。

好きな人を助けたい。好きな人を守りたい。好きな人を、幸せにしたい。

その想いは——間桐桜の心にも届いた。

繋がれていない手で涙を拭う。嬉しくて、嬉しくて。止まらない涙をぬぐい続ける。

声が出ない。返事を返さなければならぬのに、言葉を伝えようとするたびに胸がつかえる。

その苦しさすら幸せに感じるほどに、間桐桜は嬉しかった。

「間桐先輩……間桐 桜さん。」

僕と、付き合ってください。」

「っ……は……は……は……っ……!!」

赤崎篠辺が間桐桜を抱き寄せた。赤崎篠辺の胸の中で、間桐桜は声を上げて泣いた。

あの時とは違う。幸せの涙を。

これは、陽だまりのような心を持つ赤崎篠辺が、極寒の過去に囚われた間桐桜を救う物語である。

おまけ 『今日の桜』

「あああああーっ！ど、どうしようっ!?!いい勢いで告白してOKもらっちゃったけど、そ

のままびしょ濡れだからって桜先輩の家に招待されちゃったっ!し、しかもなんで僕ベツドに腰掛けてるのっ!?!こ、これはアレかな?も、もう男を見せないといけないよねっ!?!き、緊張するっ。桜先輩シャワー浴びてくるって言ってたけど、い、いつまでかかるんだろうか。うー。心臓がドキドキするよう。」

「お待たせ、篠辺君。」

「い、いえっ。全然待ってなああああ!?!」

「あら、どうしたの?」

「せ、先輩っ!?!なananなんですかその格好!!!」

「え、コレ?」

「逆バニーだけど?」

「そ、そんな破廉恥ですなカツコつてあるんですかっ!?!」

「あ、ごめんなさい篠辺君♡私もう我慢できないから♡♡♡」

「ひゃうっ!?!い、いきなり押し倒され…っ!?!」

後書きとこれから

どうも。ローランゲート・ペロペロ丸です。

ロンゲ丸とも呼んで下さい。

この度は『間桐先輩の2度目の恋』を見てくださり、誠に有難うございます。

今回はあとがきとして、裏話的な話をしようと思います。

まあ、特に見なくてもいいんですけど。

【赤崎篠辺について】

ご存知の通り、ワカラセられ系主人公です。

本編では間桐先輩の性欲の捌け口であり、逆レされるだけのキャラであります。

性格も明るく真面目な愛され系キャラと、ホントに強い個性のないキャラですね。

誰かとセットで映えるようなタイプです。

キャラの構成は、衛宮士郎と間桐慎二を足して2で割るような形を考えていました。

真っ直ぐな所は衛宮士郎から。

気弱な所は間桐慎二からですね。

といっても、ホントに一部分だけです。

だって、衛宮士郎は真っ直ぐだけど空洞なところがありますし、間桐慎二は気弱な性格に捻くれが混ざるので殆どそう見れないんですもん。

そんなキャラになった理由は、最終話のあとがきに面倒だと言った伏線が関わってきます。

まあ、それは後に置いて。

とりあえず赤崎篠辺の話をしましょう。

名前の由来ですが、出来るだけFateっぽい感じに名付けようと思っていました。

一応候補としては

羽繰（ハクリ）

正直（マサナ）

次郎（ジロウ）

がありました。

まあ、語感が良かったのは篠辺なのでそれが決め手ですね。

良くある名前にしちゃうとFateっぽさが消えるし、あまり凝り過ぎるとわけわか

んなくなるので、ちょっと大変でした。

そもそも、キレイって中々名前にしないでしょ？（偏見）

赤崎という名字は、逆に普通だけどあまり見ないような感じのものをチョイス。

結果、赤崎篠辺となりました。

後、男でも女でも使えそうな名前という制限もつけています。

まあ、違和感はないかと思えます。

【間桐先輩について】

これが言ってた伏線的なやつですね。

作中では間桐桜を間桐先輩としておりますが、一応は間桐慎二も間桐先輩扱いとしてました。

間桐慎二は本編にて遠坂凛に対し、捻くれた恋心を抱いているような描写がありました。

どっちかっていうと、自分に釣り合う人物という感じでしたけど。

それを慎二にとっての1番目の恋と仮定するならば、2番目は誰か？

この作品では、間桐桜としました。

なので、1話で『セカンドヴァージンが兄さん』という文をいれたのですが。

ここからはこじつけというか、オリジナルな設定をバンバン入れてきます。

『今日の慎二』で、慎二に人体錬成させる描写をいれました。そこで慎二はみんな大好き真理くんに会っています。

さて、真理とはなんでしょう？

鋼の錬金術師の中で、フラスコの中の小人はこう言いました。

『人間が思い上がらぬよう正しい絶望を与える。それこそがおまえ達人間が神とも呼ぶ存在・・・「真理」だ』

この台詞の中で、『神とも呼ぶ』という部分を Fate の世界観に当てはめようと考えました。

すると、FGO という作品で、異界の神が騒動を起こしている事を思い出します。

結論から言いますと、『間桐先輩の2度目の恋』の世界線は、異聞帯に近い何かという設定です。

何度やっても死んじやう間桐桜を救う世界を作ろう。

慎二は、その世界を構築するために様々な世界を旅します。

そして、最後の最後に現れたアーチャー率いるカルデア勢と戦い、勝利を収めるのです。

アーチャーをメインにしたのは、異聞帯ではその背景に沿ったキャラがでるのでそこをパクリました。

1回目にプリキュア的な世界にいますよー的な次回予告をいれましたが、そもそもあれギャグじゃないです。

プリキュア世界って、びっくりするくらいシビアな展開が多いんですね。

世界の危機的なものもおおいし。

つまり、慎二サイドの話は真面目なんだよと伝える為の次回予告です。

2回目は、パンを加えた的なテンプレ次回予告ですが、これもちゃんと裏つ側は真面目です。

パンを加えた転校生として、有名なキャラといえれば綾波レイだと思います。

エヴァ世界で、碇シンジ君の妄想が見せたのがあの綾波レイだったと思います。

さて、シンジとレイの関係とはなんでしょう？

レイは碇ユイのクローンである説があるので、ユイから生まれたと仮定して建前上はシンジの妹となります。

しかし、シンジは妄想の中でレイを転校生の枠に入れました。

ここで、シンジはレイを恋愛的な視線でも見れるようにしたと解釈できます。

つまり、慎二も桜をそういう風に見ていることにすれば良いじゃないと設定しました。

FGO世界では聖杯は願いを叶える便利アイテムというよりは、無限のエネルギーを持つ小型原子炉みたいな扱いをしていますね。

でも一応は聖杯なので、そういう意図にも使える設定にしました。

これで、過去の自分に真理の扉を開かせ、御都合主義を起こし間桐桜の中の臓硯と聖杯のカケラを取り除きます。

最後に自分の願いを叶えた慎二は、真理くんに全ての記憶を対価に奪われ、元の世界に戻ります。

これが、間桐慎二の本作での行動ですね。

まあ、ぶつちやけ本編とは関係のない設定なので気にしなくてもいいです。

こんなガバガバの設定だれもわからないと思ってたのに、キリシユタリアじゃんとか言われた作者のビビリよう凄かったと記しておきます。

そうだよ。

【サーヴァントについて】

今作では、サーヴァントの容姿を持っているが、サーヴァントでは無く別キャラとして登場させたキャラがいます。

アニキとかネロちやまとか玉藻ですね。

赤崎篠辺は魔術には一切関わってないキャラなので、どうしても周りにサーヴァントを置きたくない。でも、動かせるキャラが少ないのは困る。しかし、SNのサーヴァントを出すのもなあ。

そんな葛藤からextraのキャラを使おうと思いました。

アニキはどっちにも出てるけど。

【最後に】

感想にも頂いております番外編なのですが、リクエストとか頂けたら書こうと思います。す。

しかし、今後はもう一つの小説をメインに書くつもりなので更新は不定期です。

それでもよろしければ、感想欄にでもご記入お願いします。

ここまで見てくださり、本当にありがとうございます。

これからも、ロンゲ丸をよろしくお願いします。

赤崎後輩奮起（番外編）

「桜さん、お願いがあるんです。」

「あら、どうしたの篠辺くん？」

「えっと、ですね。僕ら、お付き合いが始まってもう2年経ちましたよね？」

「そうね。最初の頃は『先輩』って言ってた初々しい篠辺くんも美味しかったけど、今のちよっと大人になった篠辺くんも食べ頃って感じよ？♡♡」

「いや、あの。そういうことを聞いた訳ではなくてですねっ。あ、あの！僕の体を撫で回すのをやめていただけるとっ!？」

「え？誘ってるでしょ？♡誘ってるわよねコレ？♡私のビーストがもう宝具レベルMAXまで溜まったわよ？♡♡篠辺くんも溜めよ？♡♡今夜も2人の体液でどろけよ？つかとろけるから♡♡待てとかないから♡♡早く三つ指つかせるダーリン♡♡♡♡♡」

間桐邸のベッドで毎夜繰り広げられるやり取りからのスタートとなる番外編の始まりである。

あの幸せなスタートからもう2年の月日が経っている。えっ?どう見てもバッドエ
ンド?

諸君の想像通りかはわからないが、この2人はとってもラブラブな毎日を過ごしてい
るのだ。

諸君と違って！（ヘイト）

本編が楽しみな諸君と違って！（自刃）

つまり、これはハッピーエンドである。いいね？

しかし、どうにも赤崎後輩……いや、そろそろこの名称も変えるべきだろう。

改めて、赤崎彼氏はどうも間桐彼女に物申したいらしい。一体なにを言いたいのだろ

うか？

アレかな？流石に搾り取られすぎて色々カツカツなのかも知れないねっ。

しかし、間桐彼女は既に宝具を発動しているっ！

えっ、何してるのかって？

セツ??スに決まってるんだろ（真顔）

☆☆☆☆

おまけ『今日の凜（＋イリヤたん）』

「……………マジ?」

「ええ、マジよ。ホントの本気でアンタの妹ヤバいの。すつごくめんどくさいのっ!」

「い、いやあ。確かにあの子、のめり込むと歯止めが効かない感じだったけど」

「そんな軽いモンじゃねえの! 大変なの!」

「お、落ち着きなさいよイリヤ、ね?」

「ね? じゃないわよドスケベ女のお姉ちゃん。」

「それやめてくれない!? なんか風評被害凄いからっ! 私これでも一応勝ち組ヒロインなんですけど!」

「あ、あ、あ!?! 喧嘩売ってんのかテメエ!?!」

「あ、ごめん」

「いらねーんだよお! 謝罪とかそーゆーのは求めてねえんだヨオ!! どうせさあ! 私はアンタ達と違ってヒロイン枠じゃねーよ!」

「い、いや。確かにPC版はそういうシーン無かったけど」

「欲しかったノオオオ! 私も! 濡れ場! 欲しかったノオ! シロウトくんずほぐれつしたかったのよオオオオ!!」

「い、イリヤ？ほら、そろそろおまけも終わりだから」

「アンタの妹がガキの頃から濡れ場してっからさあ！いくら合法ロリでも非合法ロリには敵わないの！背徳感。パないの！！私にも竿役よこ

次回『誰を壊したいかは感想で決めます』

☆☆☆☆

「桜さん！お願いがあります！」

「なあに？篠辺くん♡」

「今日もお仕事を終えた2人は、2人で間桐彼女の作ったご飯を食べている。

「こんな毎秒発情期でも一応ヒロイン。美味しいご飯を赤崎彼氏に食べて欲しいのだっ！」

「僕と！デートしましょう！」

「2年だ。（真面目）」

「2人が付き合って、もう2年になるのだ。

「なのにも！関わらず！2人は！」

お外でデートをしていないのである!!

普通のカップルなら、水族館とか行ったりアーティストのライブ行ったりするだろう。

外食もアリだ。たまにはそういった息抜きも悪くない。

しかあし!

この2年間で、2人が行った事は!

金を稼ぎ!

お家に帰り!

遺伝子マゼマゼ遊びだけなのであるっ!!

最初は赤崎彼氏もそれで良かった! 爛れた生活は純粹な彼には未知の世界だったから!

だが、流石にコレはおかしいっつ。

そろそろ普通のカップルみたいな事がしたい! 大好きな間桐彼女を喜ばせてあげたいっ!

その想いが、彼を突き動かすのだっ!

これは、どピンク頭の間桐先輩とっ、何とか思いやりいっぱい
の甘々デートをする為
に、赤崎後輩がいっぱいがんばる話であるっ!!